
今日から世界を救う勇者様！？

kinoko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日から世界を救う勇者様！？

【Nコード】

N7458X

【作者名】

kinoko

【あらすじ】

夏休みに幼馴染の賢治と妹の舞と図書館に行った勇人。妹舞が3冊本をもってきてよんでみると、本が目が開けないほど光って、目開けてみると王様が「世界を救って下され！」と。最強魔法つかいの妹と真面目な賢者の幼馴染と最弱勇者の兄がおりなす冒険の物語。

今日から勇者です。

「とりやあゝ！」

「ていてい、とりやーーーー！」

と勇人は連続で斬りかかる。そして、それを見守る勇人の妹舞。

「ゴスッ」

「うつ・・・」バタッ。と一撃をくらい倒れる勇人。

「お兄ちゃん！モンスターめ！敵を討ってやるううう！」

「ラ・ギガファイヤーーーーー！」

「バスッ」と勇人の幼馴染の賢治に叩かれる舞。

賢治はもっていた槍でモンスターに一撃を与えモンスターは消え去る。

ふうと賢治が一息つくと、

「なんで、止めたのよーーーー！」と舞が叫ぶ。

「たかが、スライムなんざに上級呪文使うバカがいるか！」

「いいじゃない、使えるんだし」

「スライムごときに使ってたら1分もMPもたんわ！」

「それと、勇人！！何スライムごときに負けてんだよ！それでもパ
ーティの中心の勇者なのか！！」

「け、賢治い・・・キズグスリを・・・」

「誰がやるかつ！こんなペースで使ってたらずぐになくなっちゃう
わ！！」

「はっ、はくじょうものめえ・・・」 「バタツ」

「お兄ちゃんーーーー！」 舞が勇人に泣きながら駆け寄る。

「ハア」と賢治はこれからもこんな事が続くのだと思うと大きなた
め息が出た。

「なんでこんな事になってしまったのだろうか・・・」

「おい、勇人いるかー」と玄関から賢治の声が聞こえる。

新作のゲームをやっていた勇人は中断して、玄関に向かう。

「なにか用か？賢治」

「どーせ、だらだらゲームでもしてたんだろ。なら一緒にプールでもいって図書館にでもいこうぜ」

勇人は本当はゲームの続きをしたかったが、勘づかれた事もありなぜか悔しくなり行くことにした。

「そんじゃあ、いくか」

と言った瞬間ドアが勢いよく開き、勇人にぶち当る。

「痛ってえなあー!!」

舞は勇人を完全に無視して

「ねえ、賢治兄ちゃん舞も連れてって!」

「まあ、別にいいよ。小5だけど勇人よりはしっかりしてるし」

「なんだよっ!それっ!」

「プールおもしろかったなあ」

「流れるプールやっぱり最高だったね!お兄ちゃん」

「そんじゃあ、アイスでも買って図書館にでも涼みに行こうか」

「わーい！わーいアイスう！」

「俺、ソーダ！」

「兄弟そろって、まだまだ子供だなあ」とバカにしてもアイスに気をとられ気づかない勇人を心から情けなく思う賢治だった。

「図書館はやっぱいいなあ。 勇人」

「俺は、もつとにぎやかなほうがいいなあ」と言つと勇人はなにかに考えている表情をみせる。

「まさか、ここで花火でもしたらおもしろーんじゃねーかとか考えてないよな？」

「そつ、そんな事はしねーよっ！そんなことはな・・・フッフ」

「何をたくらんでるだよ。 気持ち悪いな」

「ねー！これみてお兄ちゃん」

そんな、会話をしている二人に舞が本を三冊もって走りこんできた。

「なんだ、この古くせえ本」

「昔の本みたいだな。どこから取ってきたの舞ちゃん？」

「図書館の地下倉庫」

「！。なにやってんだよ！そんなことしたらおこられるだろ！早く直しにいこうっ！」

「ええー。おもしろそうなのに。でも、怒られるのやだからなおしにいこうっ」と

とページをめくりはじめる舞。

「だから！だめだって舞ちゃん！」

「いいじゃねーか。おもしろそうだし」と賢治を止める勇人。

舞は周りに聞こえないように読みはじめた。

「なになに。この本読めるもの魔法使いとなりて異世界を救うであろっ・・・」

と言った瞬間本が目を開けてられないほどに光る。

「まつ、まぶしいい」

「なんなんだこの光は？」

3秒ほどして目をあけると、

「あっ、あれれ？まつ、舞がない！」

「ほつ、本当だ！舞ちゃんがない！」

賢治が本の数一数えすると3冊から2冊に減っているのに気がついた。

「ま、まさか。本に書いてあった事が現実になって異世界にとばされたとか・・・」

「こうしちゃあいられねえ！」

と本を1冊とり、舞と同じようにページをめくり読む。

「ちよつ、勇人？」

「この本読めるもの勇者となりて異世界を救うであろう！」

勇人の本が光り、目をとじる賢治。目を開けると。

「勇人までいなくなってるううう！」

「しかたがない、僕だって」と3冊目を手にとりページをめくる賢治。

「この本読めるもの賢者となりて異世界を救うであろう」

と、賢治が言くと本は舞と勇人との時と同じように光だした。

賢治はまぶしさのあまり閉じていた目をあけると、

「おお、賢者様までこられましたか。どうか、こちらの勇者様と魔法使い様と共にこの世界をお救いください！」と、王様の格好をし

た老人は指を指す。

賢治が老人の指した先を見ると勇人と舞がいた。そして、

「だってよ、賢治」

「そーだって、賢治兄ちゃん」

と兄弟口をそろえていうのであった。

今日から勇者です。（後書き）

初めての作品です！

いつも読む側だったので。

感想いただけるととてもうれしいです。

妹がなんかすごいです。
(前書き)

できるだけ、一日一話のペースでがんばっていきたいとおもっているので
よろしく願います。

妹がなんかすごいです。

「えっと……。つまり僕たちは今持っているこの本の力によって、ここに飛ばされたってことでいいんだよね？」と王様に尋ねる賢治。

「はい、そうです。その本は危機に瀕した世界に救世主をもたらしてくれる本で通称「奇跡の旅人」と呼ばれる本です。こちらの世界からほかの世界へとばさしていただいて、あなた方にひろってもらいここに来てもらったわけです」

と王様は説明する。

「おおおおお！なんかRPGみたいでおもしろそうじゃないかあああ！」と勇人が叫び、

「ぎゅっおおおん！おおおおおん！」と舞が意味不明な奇声をあげる。

「二人ともうるさいーなあ！今の状況がわかってないのか？舞ちゃんがつてきた本のせいで見ず知らずの世界にとばされたんだぞ！それを何おもしろがつてんだよ！」と賢治が大声で言う。

「がつきゅうううううん！きゅきゅきゅーん！」が舞は奇声を上げ続ける。

「しつこいなあ！舞ちゃん！」

「ああ、賢治。こいつ興奮するとこんな感じになるんだ。我を忘れ

て」

「えっ……。舞ちゃんそんなキャラだっけ……。」「と戸惑う賢治。

「しゅぴぴいーん！ピーーん！」奇声を上げ続ける舞。

「あの……。話をきいてくれませぬか勇人たち殿……」

「あつ、忘れてたわ。あんたのこと」とそっけなく言う勇人。

王様はとんでもないくらいに悲しい顔し黙り込んでしまった……。

「思ったんだけど、勇者とか魔法使いとか賢者とかはなんなんですか？」と賢治が王様に尋ねる。

「あつ、それはあなた方たちの職業です」と機嫌を取り戻した王様が答える。

「職業か！やつぱりRPGぽくておもしろそうだ！職業によってスキルとかあんの？」

「はい、あります。今勇人殿たちがもっている「奇跡の旅人」に読めないページがたくさんあると思う

のですが、そこに書いてあるのがスキルです。経験をつんでレベルが上がると読めるようになり、使

えるようになります。ちなみに、レベルは最初のページに書かれていますので」

自慢気に王様が言う。

「スキルも使えんのか！やったー！」

「本当だ。ほとんど読めない。おなじ文字なのに。んっ？」賢治が何かに気づいたような表情を見せる。

「どーした。賢治？」

「いやなんか一つ読めるなあと思って……。『リクル』って書いてある」王様がおどろいた表情を見せ、

「おお、さすが救世主様！初めから呪文をつかえるとは……。それは回復呪文『リクル』です。お仲間が戦闘での傷をいやしてくれます。使うときは、呪文を出したいと思いながら『リクル』と唱えてください。ほかの呪文でも一緒ですよ」

「私も読めるところあるよー。唱える時は出したいと思いながら……」

「あつ、舞様は出さないでください！魔法使いは攻撃呪文ばかりなので、周りに被害が……」

「えー。せつかくだし出したいいいいいい！」

「ふう、わかりました」と王様は言つと王様の近くにいた側近らしき人物に指図した。

「この者がバリアを発動させますので、そこにめがけて呪文をだしてください舞様」

「わーーーーい♪やったあー」と舞はともうれしそうな表情をし、

「いづくぞおー！。ラ・ギガファイヤーー！」

舞が呪文を唱えた瞬間室内の異世界の者たちの表情が変わり、

「みつ、みなのもつ！舞様の呪文に全力で攻撃呪文を唱えるのじゃ――！」

「ん？どーしたんだろ？なあ、賢治」

「ああ、みんな血相かえて集中してるなあ」

そんな事を言っていると舞の周りに紋章が現れ、無駄にでかい王室の天井の空間から

とんでもなくでかいオレンジ色のきれいな火の玉が現れ周りを熱風でつつみこむ、

「今じゃあああ！みなもの者！」

部屋の異世界の人たち約40名くらいが一斉に呪文を唱え、小中サイズの氷の玉が次々と発射され、舞の出した火の玉につき次々とあたり、

「バぁーん」と大きな爆音とともに

天井や壁やあらゆるものが吹き飛ばされた。

「おー。すごいのが出た、やったあ♪お兄ちゃん褒めて♪」ととびきりの笑顔で勇人に言うしかし、

「いや・・・すご・・・いつていつたて・・・おま・・・えこれ・・・」
「バ
タッ」

「おにーちゃーーーーーーん！」

「くそお！お兄ちゃんこんなにしたのは誰だあっああ！ぼこぼこにしてやるううう！」

「お前だよっ！」と黒こげの賢治が言う。

「今のは何なんですか？王様？」

「今の・・・は火系上級呪文「ラ・ギガファイヤ」。ま・・・わりを焼き・・・つくす・・・きわめて攻撃力の強い呪文で・・・す・・・」

「バタッ」

「王様ーーーーー！」王様の側近たちが叫ぶ。

「誰だあ！王様をやったのはあ！倒してやるううう」

「だから、お前だよっ」とまたっこつんでしまふ賢治だった。

妹がなんかすごいです。(後書き)

もっと次から冒険者にします。
がんばって。

旅に出ます。

舞が出した「ラ・ギガファイヤ」の後かたづけが終わった頃、

「あつ、そーだ。俺まだ本みてねーや」

「勇者だからすごいワザとか最初からあるんじゃないの？」

「うおおおお！舞みたいなのが俺にも！」

目を輝かせながらページをめくる勇人。

「まつ、舞様みたいに出してはいけませんよっ！」包帯だらけの王様が注意する。

「わかって・・・」

「どうした勇人？」勇人が絶望したような顔をみせる。

「すつ、スキルのページが全部みえない・・・」

「ええっ！」

「まあ、最初は見えないのが普通ですから」王様がさらっと言う。

「なんで俺だけみえないんだよっおおおおお」

「ぼっ、暴力反対ですっ！」王様に殴りかかる勇人。

「やめろっ！勇人」

「くそおおお！」悔しさのあまり聞こえない勇人。

「くそお、仕方がない。舞ちゃんっ！」

「アイアイさー！」舞はページをめくり呪文を唱える。

「アイスっ！」

「うぎゃあああ！」勇人の足が凍りつく、

「アイスっ、アイスっ、アイスっ！」

「えっ、ちょ舞ちゃん！？」勇人の全身が凍り冷氣がただよいはじめる。

「アイスっ！アイスっ！アイスうっ」

「たっ、楽しくなってきたっ！」

「だっ、大丈夫だったか？勇人？」

「死ぬかとおもったぜ・・・」

「ごめんね、お兄ちゃん。ファイヤで今暖めてあげるから」

「そーいえば、王様なんでこの世界は今危機を迎えてるんですか？」

「あ、それはこの世界に魔王「カイザル・テンペラー・クフロ」が魔界から現れ次々と人間の領土を、

おかしていつて魔王にこの世界を征服されそうなのですっ！」

「へえ、その「カイザル・テンペラー・オフロ」が征服を企んでて、それを助けるために僕たちが来た」と

「ちがうよ、お兄ちゃん。「カスザル・テンペラー・クフロ」だよ」

「いや、舞ちゃんもちがうよ」

「まあ、とにかく「カスザル・テンペラー・オフロ」が来て大変なことになってるんです。

だから、もうこんな事してる場合じゃないんです！早く武器とか用意して早く魔王を倒してください　よ！」

「王様！全部混ざってますよ！」

「まあ、武器庫へ行きましょう！」

「わあい」魔法使いみたい「黒衣装一色の魔女みたいな格好を舞。

「魔法使いですから」

「俺は銀の鎧に剣かあ！かつこいいじゃないか！」

「この世界には勇者にしか装備できない剣がありますので、その剣でしっかり上達してくださいね」

「本当にゲームみたいだなあ」

「もう、いいから旅に早くでようよ」ととてつもなくダサイ緑の服を着た賢治言っ。

「あはははは」なにその格好賢治兄ちゃん」

「ははははは！賢治なんだよその格好！」

「もう放つといとくれよっ！」

「では、いつてらしゃいませ。救世主様たち殿」

「いつてくるよ」

「俺が魔王倒してくるぜえー！ー！」

「それでは、王様キズグスリや装備までもらってすいません」

「いえいえ、あなた方に世界を救ってもらうのですからこれぐらい」

「それではいつてきます！」

こうして三人の旅は始まったのであった。

旅に出ます。(後書き)

じょじょに回覧してくれている方増えてくれてうれしいです。

がんばっていききたいと思います。

スライムに負けました。(前書き)

PC制限されちゃいました(泣)

めげずにがんばっていきます。

スライムに負けました。

「なあ、賢治い。まだ王様の言ってた町につかねーの？」

「うーん。もう少しのはずなんだけどなあ」

しかし、目の前には広大な草原が広がり町は姿を現さない。

「おなかもへってきたなあ……。あつ！」

舞が目の前の木を指で指す。

「見てみて！おいそうな木の実だよー。たべれるかなあ」

「本当だ！俺も腹減ってたんだ。食べよう！」

木を揺らして木の実を取ろうとする勇人。

「いや、ちょっと待って。毒があるかもしれないぞ。王様からもらった図鑑でと……」

「げほお！」

「お兄ちゃんっ！」

勇人が木の実をたべた直後、血を吐く。

「だから待てって言っただろ。それ、毒あるみたいだから、これ食べる」

そう言つて勇人に毒消し草を渡す、

「毒消し草もあるのか、本当にRPGみたいだな・・・げほおお！」

「いいから早く飲めっ！」

「今日何回目だろう。死ぬと思つたの」

「本当にお兄ちゃんは大バカだなあ」

「二回はお前のせいだよっ！」

「ん？なんだあれ？」

賢治が指を指す方向に緑色の物体が動くのが見える。

「もしかしてあれって・・・」

「モンスターだっ！」

といていつきに駆け寄る勇人。

「ハッハー！こいつらを倒してレベル上がってスキルを覚えてやる
！」

「ズガッ」

「うつ！・・・」

勇人の懷にスライムが一撃をくわえる。

「バタツ」勇人が膝をつき倒れる。

「お兄ちゃん！こいつらめえ」

舞が「奇跡の旅人」を開く、

「ラ・ギガファイヤー！」

「ええっ！」

空に城で出したものと全く同じ、とてつもなくでかいきれいな火の玉が現れる。

「とりやああああ！」

とてつもない爆音と共に火の玉は、スライムと勇人に炸裂する。

「ぎやあああああ！」

爆発の中から勇人の叫び声が耳に届く。

火の玉がきえた後には焼け野原になった元草原と、勇人だけが残った。

「勇人」。大丈夫かあ」

「あ・・・賢治い。かつ、回復呪文を・・・」

賢治は呆れた顔をしながら回復呪文「リクル」を唱えた。

「おお、回復呪文ってすごいなあ。さっきまでの痛みがまるでない」

「てかさ、勇人。お前スライムに負けるってどーゆことだよ」

「いや・・・あれだよっほらあの・・・雑魚だからって手ぬいてミスって負けるやつ！決して本気で戦っ たわけじゃないから！」

「まあ、そーゆうことにしといてやるよ。あと、舞ちゃん！こんなあからさまな雑魚に上級呪文使って どうするの！強い敵とかきたらどーするの！たぶんこの感じだとMPみたいなものも・・・」

「あっ！あれ見て！」

「人の話を聞けよっ！」

舞が指を指した方向に荷車を押している人が見える。

「あの人についていけば町につけるんじゃない？」

「たしかにそうかもしれないなあ。ついていこうぜ！でかしたっ舞
！」

「えっへん！」舞がいばる。

「いや、でもあの人町にいくかはわかんない・・・」

賢治の話も聞かずに走り出す二人、

「だから人の話をきけっつーの！」

「ねえ、勇人君ここはどこかなあ？」

「えっとお・・・町ですっ！町！」

「へえ」。どこに周りが緑一色でラフレシアがあって、獣の鳴き声の聞こえる町があるのかなあ」

「それは・・・この町ですっ！」

「いいかげん認めるやつ！」

「グフッ！」賢治の右ストレートが炸裂する。

「はあ、だからいったじゃないかあ」

「本当お兄ちゃんはバカだなあ」

「半分は舞ちゃんのせいなんだけどね」

三人は町へいくため荷車を追い、そして暗い森についた。

スライムに負けました。(後書き)

PC制限されて思うように更新ができなくなりました・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7458x/>

今日から世界を救う勇者様！？

2011年10月23日00時07分発行